

モノローグ

関根 敏子

早稲田大学にある伊藤洋先生の研究室を初めて訪れたのは、いつ頃だったでしょうか。私がフランス政府給費留学から帰国してからだったのは間違いありません。おそらく10年以上も前のことでしょうが、今でも最初の日のことをよく覚えています。研究室のドアを開けたら、正面奥に満面の笑みをたたえた伊藤先生がいらして、「どうぞ、どうぞ」と声をかけてくださいました。その前には大きな机を囲んで、ずらりと「エイコス」のメンバーが…。

きっかけは偶然でした。帰国後、母校の桐朋学園大学音楽学部で教えていた頃に講師控室でフランス語の野池恵子先生とかわした会話から——「今までフランス・バロック音楽を研究してきましたが、オペラだけは演劇と密接に関係しているので、まだわからないところがあります」、「それだったら、日本には17世紀フランス演劇の研究会があるから、来てみたら」。この時から新しい世界が広がっていきました。

演劇と音楽の密接な結びつきを知りたい、当時のフランスで「叙情悲劇 *tragédie lyrique*」や「音楽悲劇 *tragédie en musique*」と呼ばれていたオペラの台本は、同時代の演劇とはどのように結びついていたのか——こうした疑問とともに、もう少し演劇について勉強したいとは思っていたものの、どうしてよいかわかりませんでした。そうしたところに、野池先生から上記の言葉をいただいたのです。

おそろおそろ開いた扉から首をのぞかせた門外漢の私を、エイコスの人々は暖かく迎えてくださいました。研究会でのメンバーの方々の発表や台本の購読は、何も知らない私にとってすべて貴重な体験でした。それがフランス・バロック・オペラ研究に大いに役立ったことは間違いありません。

フランスでは、今や「バロクー」（バロック音楽愛好家）という新語がすっかり定着しました。最近では古楽演奏家たちが次々とバロック・オペラの舞台上演を実現させ、CD録音やDVDも次々と発売されています。21世紀フランスの音楽界は、歌唱法、古典舞踏、カウンターテナー歌手、新演出など、まさに流行の最先端を走っているのです。

2003年12月、「エイコス」の研究会を通じて、演劇でも新しい波が登場していることを知りました。フランスから当時の朗誦法を研究している俳優が来日し、講演と実演を披露してくれたのです。現在のフランス語とは違って、大きな抑揚のある朗誦。それは、そのまま五線譜に音を書けるほどでした。

その時とくにお願ひして、リュリのオペラ「アルミード」の有名なモノローグを、当時の演劇のように朗誦していただきました。実際その抑揚を、リュリが書いたモノローグの旋律と比べてみると、ほぼ同じ！ そこに音楽の力が加わることで、感情の起伏がさらに強調されていました。

この研究会の末端に加えていただいでなければ、こうした経験をするにはできなかったにちがいありません。研究会に感謝するとともに、伊藤先生のますますのご健勝とご活躍、さらに「エイコス」の充実と発展を心より祈っております。これからも、よろしくお願ひします。